

ヘーヴァジュラ系儀軌 にみる灌頂

島田 茂樹

インド後期密教に於ける灌頂は、内外の諸学者の研究によって、その概要を少なからず知ることができ。従って、本稿では対象をヘーヴァジュラ系儀軌に限定し、概要を把握して他の無上瑜伽タントラ系と対比を試み、加えて、灌頂の個々の段階に於けるヘーヴァジュラ系独自の灌頂法の詳細な所説をもつて、思想並びに作法を比較・検討せんとするものである。

その結論に対して、直接関与する事柄は灌頂自体であり、基本構造は他の無上瑜伽系も含め、すべて同様に、「四種灌頂」の形式をとる。即ち、(1)瓶 (*Kalāśa • bhum-pa*) 或は阿闍梨 (*ācārya • śloka-dpon*)、(2)秘密 (*guhya • gsañ-ba*)、(3)般若智 (*grajñāna • śes-rab-ye-śes*)、(4)第四 (*caturtha • bshi-pa*) 或は言葉 (*abhidhana • mion-driod-pa*) の四種である。ここで、まず本題に入る前に、実際の灌頂が執行される前段階に於いて、当然のことながら踏むべき順序にして不可欠なるもの、所謂、マンダラ造壇に少し触れておく (なぜなら、Saroruhavajra 著による『Hevajratanttra』の注釈・『Hevajratantapanjika padmini nama』・北京版・五三卷・NO. 2311 の『H・T, I-X』に該当する箇所にも「灌頂はまたマンダラと懸け離すことのできないものであつて……」とある故に)。

例えば、造壇の方法 (土地の選択、測量……等) は、『薩迦耶經』等初期密教よりの伝統的な作法を継承しているといつてよい。ただ、マンダラが描かれるべき場所の候補地として、閑静な地、園林……云云という通例的な場所 (父タントラたる『秘密集会タントラ』に於いても然りである) の中で、殊に、これこそ母タントラの宗教性とも言ふべき尸林 (*śmaśāna*) を強調して掲げる (しかし、後に態々地下一肘中より、尸林の尸林たる特徴といえるであろう骨や炭を取り除かねばならないという点ではやや矛盾する)。いみじくも、津田真一先生が御提唱される如く、当に「尸林の宗教」であり、また、ヘーヴァジュラ系サダーナ (成就法) によれば、マンダラの最外周に火炎 (火山)、金剛、蓮華 (文獻記述は稀) と共に、金剛 (「壇」の内側に八種の尸林 (*Aṣṭaśmaśāna*、樹・八方守護天・八大魔王・夜叉・雲・山・塔を描くが、これについては日本宗教学会・第四十一回学術大会にて発表予定) を観想するか或は描く所以でもある。

さて、順次儀軌に従つて根本となるマンダラ (*mūlamanḍala*)・大曼荼羅が完成すると (恐らく伝統的七日作壇法) いよいよ本題たる弟子灌頂が開始される。初めに述べたように、第一番目には瓶、或は阿闍梨灌頂が行なわれる。灌頂マンダラは、根本マンダラの東門 (「方向」に、水壇法により、四角にして中に八弁蓮華を描き、中央に青黒の金剛、東弁に白いチャクラ…… (中略) 等のサマヤを描く『Abhiśekavi dhī』(A・V)・北京版・五七卷・No. 2425) 同様、『Hevajramanḍala-kamakarmavi dhī』(H・K・V) (北京版・五六卷・No. 2324・五七卷・No. 2419) では「東」門の南方に八弁蓮華を描く (『H・K・V』では四種灌頂すべてのこの

灌頂マンダラを使用する。即ち、根本・大に対して一つの灌頂マンダラ・小を設ける例は『蘇悉地經』・『陀羅尼集經』等にもみられる。また、瓶（阿闍梨）灌頂は、文獻によれば、さらに、水、宝冠と布帶、金剛、鈴、名、曲刀と髑髏（カパーラ）の六種に細分化され、順次五仏並びに大勇猛（Heureka）に当て嵌める（H・K・V）。一方、『A・V』では第一番目（瓶）を外灌頂として（秘密以下第四灌頂までを内灌頂とする）、十一種に細分する。即ち、水、宝冠、金剛、鈴、名、金剛戒、般若幻（?）、不退転、言説、授記、出息（安息）である。これらの名称は、主に使用される持物に由るものであるが、それに相当しない灌頂（名と出息）も、文獻には使用すべき持物（例・名では金剛と鈴）が各々記されている。紙面の都合上、各段階の内容は省略するが、これとほぼ同じ名称の記述が『Sāṃvāradyatantra』（津田真一本）・十八章（㊸・㊸）に十種、カーラチャクラ系たる『Sakoddesa』（北京版・五六卷・No. 3）には七種みられる。

次に秘密灌頂。灌頂マンダラは北方。描写は同様であるが、灌頂マンダラの四隅に棒を立て、幕を張って中が見えないように遮断する（A・V）。ここでは、阿闍梨は弟子より般若母たる十六歳の少女を献納され、少女は『H・T』（T・T）所説の無我明妃を中尊とする計十五女神より構成される *visuddhi* なる瑜伽女輪（*yoginickra*）を加持する。その後、阿闍梨と無我明妃たる少女は性的瑜伽を為し、大衆・菩提心を生じ、それを螺貝にて取り、弟子の口中に落す。菩提心を植え付けるのである。

第三番目は般若智灌頂（般若と智の二種に分化される場合もある）。灌頂マンダラは南方。弟子は般若母を阿闍梨より委ねられ、

結合し、その過程に於いて、『H・T』（T・T）に於ける四歓喜等に従って師より教授される。ところで四歓喜（*catur-ananda*）は通常、①歓喜、②最上歓喜、③離歓喜、④俱生歓喜とされるが、『H・K・V』では、①歓喜、②真実喜、③自性喜、④断喜の名が挙げられている。さらに、これらは身体中の四輪ではなく、*hola*（男性器）の諸部分に各々対応される。即ち、歓喜は陰囊からボーラの根元に達する間、真実喜は「根元から」中央に達する間、自性喜は「中央から」ボーラの先端に達するところとなし、断喜はその各々の瞬間に働くものとして、四輪と四歓喜が相応するという。そして、性的瑜伽の成就の結果として、今度は弟子自身が直接カッコーラより舌にて甘露を取る（二枚貝及び螺貝で取るとは禁止）。それは正に、般若母のカッコーラより智の自性たる菩提心を取ることである。

最後に第四灌頂（『Sakoddesa』では言葉）。灌頂マンダラは西方。般若母を伴うが性的結合はしない。弟子は寂靜の灌頂、最勝の灌頂を願う（北京版・五六卷・NO. 2366 では最勝大衆の究竟なるもの）。それに対して、師は『H・T』（H・T）所説の「生類を殺すべきである……云云。」に等しき *samaya* 並びに *samvara* を与え、それが守られる時、第四灌頂は授けられる。それは、直接ラマの口（言葉）より知られるべしとする。即ち、言葉のみによって伝授されるのである。故に、その内容は当然のことながら文獻には明確にされない。しかし、この第四灌頂こそが、最も重要な意義を有するものであることを考慮すべきであろう。

さて、以上のように、次第に従って、ヘーヴァージュラ灌頂は完成したのである。

（東洋大学大学院）